

(二〇一六年度)

3 国 語 問 題 (六〇分)

(この問題冊子は19ページ、三問である。)

受験についての注意

- 一、試験監督者の指示があるまで、問題冊子を開いてはならない。
- 二、試験開始前に、試験監督者から指示があつたら、解答用紙の右上の番号が自分の受験番号と一致することを確認し、所定の欄に氏名を記入すること。次に、解答用紙の右側のミシン目にそつて、きれいに折り曲げてから、受験番号と氏名が書かれた切片を切り離し、机上に置くこと。
- 三、試験監督者から試験開始の指示があつたら、この問題冊子が、右に記したページ数どおりそろつていることを確かめること。
- 四、筆記具は、HかFかHBの黒鉛筆またはシャープペンシルに限る。万年筆・ボールペンなどを使用してはならない。時計に組み込まれたアラーム機能、計算機能、辞書機能やスマートウォッチなどのウェアラブル端末を使用してはならない。
- 五、解答は、解答用紙の各問の選択肢の中から正解と思うものを選んで、そのマーク欄をぬりつぶすこと。
- 六、マークをするとき、マーク欄からはみ出したり、白い部分を残したり、文字や番号、○や×をつけたりしてはならない。また、マーク箇所以外の部分には何も書いてはならない。
- 七、訂正する場合は、消しゴムでいいいに消すこと。消しきずはきれいに取り除くこと。
- 八、解答用紙を折り曲げたり、破ったりしてはならない。
- 九、試験監督者の許可なく試験時間中に退場してはならない。
- 十、解答用紙を持ち帰ってはならない。
- 十一、問題冊子は必ず持ち帰ること。

— 1 —
次の文章を読んで、後の問に答えよ。

人間には主体性がなければならない、右を見たり左をうかがったりしないで、独自の判断をしなければならぬ、と賢けにいわれる。はたして人間には可能なことだろうか。他人のまなざし、世間の眼を全く顧慮しないで生きられるだろうか。われわれは体面や見栄を無視できるだろうか。——「冬の水 一枝の影も 欺かず」(草田男)——この句を前にして、おのれの素心を顧みる時、人は一種の羞恥感をいだかないだろうか。われわれのまなざしは決してきびしく澄んでいない。「諸縁を放下する」とか「乾坤方外の人」とかいうような、多くの美しい言葉はあるが、これを身につけた人を見たことがない。蘇軾は雪をあざむく純白の梨花に目をむけた時、このような清明なものを、一生の内ですずかにしか見ることがないのを嘆いている。「惆悵東欄の一株の雪に人生幾たびの清明をか看得ん」これはわれわれの彷徨する平面と、星の高みとの距離を意識せしめる。「眸をあげて 梨の花見つ 白牙えて すでに神徒と 我のへだたり」(莊雪子)。

われわれは生活の遍歴の中で、決して雪白の独航をしているわけではない。行路の難において、人間は愛憎のまなざしを四方に投げかける。また至るところの往来で、他者のまなざしを浮塵の内うぶじんに受ける。それはさまざまに重い影響を与えずにはいない。人はたえず他者のまなざしを意識し、それに傷つけられ、あるいはそれを求め、それに支えられているのではないだろうか。それは人間性そのものがそうなのか。それとも育ちの賤しく、行為の純でないためなのだろうか。

たしかに人の世を「無生の一曲」と見たり、「幻生幻滅」といえば別であるが、真にそれを悟得することはむずかしい。こういう言葉を容易に口にするごとく自体が、その境地にいないことを示している。——「なにもかも 失せてすすきの 中の路」(草田男)——これは苦患の末の句、枯淡素白の歩みの句として、すぐれて美しい。しかし、その境地へといつか至り得ることはとうてい期しがたい。芭蕉の周知の句「此道や 行人なしに 秋の暮」には、もうひとつ別な句案があったといわれる。それは「人声や 此道かへる 秋のくれ」であって、明らかに前者に比して劣っている。何故ならばここでは前者の蕭条とした孤行は失われ、

X

たしかに人間の最も真実ないとなみは、この地上の、人目に立たない場所で、静かに、素朴な忍辱^{にんじやく}の手によって行なわれている。しかしそれにもかかわらず、その人々も、おのれを見守ってくれる何らかのまなざし、何者かの照覧をひそやかに期待しているのではないか。

ニーチェはかつて「ギリシア人のその神々に対する関係は、俳優が高位の観客の群に対する関係のごときであった」と述べている。実際、ギリシアに旅して、神々の座といわれた、きびしくそそり立つ、あのパルナツスの山々に接すると、いかにもありそうなことである。もしニーチェの推察が事実なら、ギリシア人は、あたかも常に彼が神々のまなざしの下にあることを、意識しながらふるまつたことになる。人間の公的生活はいつも他者の注目するところであるが、それを宗教的な生活にまで類推したのはヘラス的な想像力の生んだものであるうか。しかし信仰のあるところ、どこでも同じ現象²がみられる。仏教においても、遍照^{へんじやう}し、隈なく四荒をまなざす大悲の眼はいつも考えられ、人々のふるまいを規制していた。山中を独り歩む遍路すら、その筈に「同行二人」としるすのである。

またたとえ宗教的な意味でなくても、君子はひとりを慎む、とよく言われた。それは守りたいからこそである。「空罈^{うつぼ}のひとめを繁み逢はずして……」(万葉)、「知らるめや 身こそ人目を 憚^{はば}りの 関に涙は」とまらざりけり(後拾遺)——このようにまなざしは、われわれをそのかりそめの安穩^{あんゑん}から奪うのである。歴史の舞台で「人々の眼が彼にそそがれた」ばかりに、いやおうなくおのれの無力を隠し通せた人もいれば、その反対に、すぐれた天賦を枯らした人もあろう。「私の手にかかる」と、すべての真実が贖金^{にせがね}になる」とある人は率直に、かつ自虐的に告白する。それはどうしても他人のまなざしを意識して芝居をし、マスクをかぶることから由来する。しかし考えてみれば誰でもそうで、山の中に幽独して住む以外に、その嘆きは避けられない。またたとえマスクをはずしたからといって済むものでもない。「仮面すべて かなぐり捨てて 生くる日は なお寂しからむ 今のわれより」(山本あき)。

⁴ 他者にまなざしをむけられることは、同時に他者のまなざしになることである。それは吹きわたる秋風のうちにいると、われわれが秋風になるようなものである。それは他者となっておのれを見ることにもなる。西欧の中世では、教育の場というも

のはきわめて厳格で、宗教的、禁欲的な雰囲気がかつた。しかし学校における演劇に対しては、たしかに宗教劇ではあつたが——比較的寛大で、時には奨励さえされた。それは演劇というものが観客に与える感動は別として、演技者が他人の役をやることによつて、いわば他人のまなざしと立場を学び、固定していた自分の視野の狭さと偏りに、改めて気付く教育的な長所があつたからである。

今日でもモレノのはじめたいわゆる「心理劇」というものが、臨床心理学的な診断や治療に多く用いられる所以もそこに存する。これは特殊な舞台と設定で、即興劇をさせ、その間にさまざま技法を使って、その人間の内面を投影させたり、自分に関する洞察に導いたりするのである。

人間は、彼がただ自分に対してだけ存するのか、それとも他者のまなざしの故に生きるのか、分明的でないことが多い。武器を用いる実際の戦いであれ、精神的な戦いであれ、戦士にとつて敵に対する不安がなくなることはない。しかし、それよりも他者から怯懦であるまなざされる不安の方がいっそう強い。そして事実、臆病の印象を他者に与えまいと努めていくうちに、他者のまなざしと関係のない真の勇氣が育つてくることもある。逆にいえば、われわれのまなざしが他者を形成することになる。ゲーテの「ある人をそのままに取り扱わず、その人がそうあるべきであつたかのように扱うことが重要だ」という人生の英知の言葉が真実になつてくる。武士の旗指物は、おのれの存在を示す危険とともに、おのれの矜持を示し、敵味方にまなざされるその旗指物の存在によつて、まさに勇敢に戦わざるを得ないのである。プルタークのあげている例であるが、ひとりのスパルタの兵士は、兵馬の習慣によつてそれぞれの紋章を描くべき彼の楯の上に、なんと小さな実物大の蠅を描いた。彼の戦友は彼を嘲笑して、それは卑怯のしるしであり、自分を小さく隠そうとしているのだと非難した。「いな」と彼は答えた。「全く反対だ。敵がこの小さな蠅をはつきり見ることができるとまで、私は敵に近づくのだ。」——この例は兵士に実際に存した不安と、ただちにそれに代つた勇氣との間の緊張が、このような奇妙な象徴的表現をとらせたことを示している。

「個人と観察者」という論文の中で、ゲープザツテルは、犬儒学派のディオゲネスを、アリストIPPボスが手きびしく批判した逸話を紹介している。周知のようにキニク学派の祖であるアンティステネスは、ソクラテスを慕う思想家でもあり、高潔な

人格者であった。しかし、その弟子のディオゲネスはすでに充分に俗物であったらしい。アリストIPPUSは、ディオゲネスについて、「穴のあいた彼のほろの長衣チニコツクのどの穴からも虚栄がのぞいている」と述べている。虚栄が、人目を奪う、目のさめるような緋ひの長衣によってではなく、襤褸らんろうの布の穴によって算かきえられているという点で、それは矛盾した印象を与える。しかし、アリストIPPUSには証拠があった。彼はある日、たまたま同じ浴場でディオゲネスに出会った。彼は一足先にそこを去って、その際そつとディオゲネスの破れた服を着て、彼自身の緋の長衣を、その代わりに残しておいた。やがてそれに気づいたディオゲネスはたちまち色を失った。彼は緋の長衣を世の中の何よりもまともになくなかったからである。それがアリストIPPUSの証言の根拠になった。

(霧山徳爾「人間の限界」より)

〔注〕方外：俗世の外に身を置くこと。

惆悵：恨み嘆くこと。

ヘラス：ギリシア全土をギリシア人自身が呼んだ名称。

遍照：あまねく世界を照らすこと(特に仏の光明について言う)。

モレノ：ヤーコブ・モレノ。オーストリア系アメリカ人の精神分析家。

ブルターク：ブルタルコス。帝政ローマ期に活躍したギリシア人の著述家。

ゲーブザッテル：ドイツの精神科医。

犬儒学派(キニク学派)：キニコス学派。古代ギリシアの哲学の一学派。

緋：濃く明るい赤色。

問一 傍線部1「これを身につけた人」とはどのような人か、次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 自己と他者を見るまなざしが鋭く、人間性の真実を洞察することのできる人。
- b 他の人々にどう思われるかを気にせず、自分自身の生き方ができる人。
- c 自己利益を守るために嘘をついたりだましたりすることのない正直な人。
- d 自己を犠牲にしても正しいことを全うしようとする心のまっすぐな人。

問二 傍線部2「同じ現象」とはどのような現象か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 公共の場でのふるまいは他の人々の敵しいまなざしにさらされるといふこと。
- b 近代の思想家が神々などの超越的存在を人間の行動になぞらえて説明すること。
- c 人間のふるまいはあたかも観客に見られる俳優の演技のようなものだと感じられること。
- d 人間のまなざしだけでなく宗教的な超越的存在のまなざしを意識して生きること。

問三 傍線部3の短歌はこの文章ではどのような意味に解されていると考えられるか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 他者のまなざしに合わせていい人を演じていても親しくしてくれる人は少ないのに、演技をやめてほんとうの自分を世間にさらしたらもっと多くの人が遠ざかっていくだろう。

b 他者のまなざしに合わせて演技しているのでありのままの私を誰も知らないのは寂しいが、ほんとうの私を知られたとすればもっと孤独を感じるだろう。

c 世間に善人の顔を見せつつ偽善者として生きるのは辛いことだが、ほんとうの私をさらけ出して悪人として生きていくことはもっと辛いことだろう。

d 世間の人々がみな本音を言いあつて生活するようになれば、人間関係がとげとげしいものになって、現在のうわべだけの人づきあいよりもっと寂しい事態になるだろう。

問四 傍線部4はどういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 他者にまなざしを向けられていることを感じることによって、その他者の感情が伝染する。

b 他者のまなざしにさらされ傷つけられることによって、他者の心の痛みを自己の痛みのように感じる。

c 他者にまなざしを向けられていることを知ることによって、他者の視点から自己を見ることを知る。

d 他者のまなざしを気にしそれに自己を合わせることによって、いつのまにか他者に期待されるとおりの自己になる。

問五 傍線部5のゲーテの言葉はこの文章ではどのような意味に解されているか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a その人が現にもっている力以上の力をもっているかのように接すると、その期待に堪えて力があるかのように見せかけているうちに、ほんとうにその力を発揮することがある。

b 公共の場では、人々が現実にもっている能力の優劣にかかわらず、一定以上の能力をもっているものとして扱うほうが公共の利益になる。

c 人は他者から劣っていると見られることを嫌うものだから、互いに尊重し合うためには、実際にもっている以上の能力をもっているかのように接し合うほうがよい。

d 一般に人は自己も他者も気づいていない優れた能力をもっているものなので、実際の見かけよりも優れた能力をもっているかのように扱うほうが人々のためになる。

問六 傍線部6の兵士の例はこの文章ではどのようなことを言うために用いられているか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 一人の人間のなかには臆病な気持ちと他人に臆病だと見られたくないという気持ちが共存しており、それらはしばしば微妙な緊張関係にある。

b 他人に臆病だと見られたくないという気持ちはたいへん強いので、臆病だと疑われた人間は見え透いた嘘をついてでもそれを打ち消そうとする。

c 人間は臆病であると同時に他人に臆病だと見られることを嫌うので、戦場での不安を紛らわすために驚くほど勇敢な行動に出ることがある。

d 他人に臆病だと見られたくないという気持ちはたいへん強いので、自分より他人の方が臆病であると思ひ込みがちである。

問七 傍線部7のアリストテレスの言葉はこの文章ではどのような意味に解されていると考えられるか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a どんなにみすばらしい衣服で隠そうとしても、自惚れうぬぼの気持ちが透けて見える。

b 貧しい暮らしをしていても、それを補うに足る精神の豊かさをもっているという自尊心こころごころが垣間見える。

c 今こそ恵まれない境遇にいるが、いずれ立身出世してやるという野心うぬぼがこぼれ見える。

d 世間の評判など気にかけない人格者だと思われたいという気持こころちが窺うかがわれる。

問八 波線部で述べられている、人が「他者のまなざしを意識し、それに傷つけられ、あるいはそれを求め、それに支えられている」ことの例が本文に見られる。その例に当たらないものを次の中から一つ選べ。

- a 松尾芭蕉の句「此道や 行人なしに 秋の暮」
- b 神々をあがめるギリシア人
- c 暹路の笠に書かれた「同行二人」
- d 武士の旗指物
- e 犬儒学派のディオゲネスのぼろの長衣

問九 空欄Xに入れるのにもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 世間の常識にとらわれているのが感じられるからである
- b 過去に対する未練がにじみ出ているからである
- c 雑踏のざわめきが暗示されているからである
- d 他者が意識されているからである

問十 次の中から本文の内容に一致するものを二つ選べ。

- a 人間は世間の目を気にせずに生きていけるし、またそうすることができるよう努力するのが望ましい。
- b 他者のまなざしを気にせずにはいられないのは、その人の人間性が十分に陶冶されていないしである。
- c 松尾芭蕉のように孤行の生を生きることを知っている人は、他者のまなざしに惑わされずに生きることができる。
- d 人間というものは他者のまなざしを意識し、それによって影響されずにはいられないし、またそれは必ずしも悪いことではない。
- e 多くの宗教が超越者のまなざしを想定しているが、これは人間の悪行を戒めるためにつくられた虚構である。
- f 演劇のなかで意識的に演技をすることには教育的な意味があるが、日常生活で無意識におこなう演技は見苦しいだけでなく有害である。
- g 他者のまなざしに無関心だと思われる人が、実は他者のまなざしを強烈に意識していることがある。
- h ギリシアの賢人たちの間では高い身分を表わす色の長衣を着ることを慎むのが、真の高潔な人格の証だと考えられていた。

二

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

但し、上古の歌は、わざと姿を飾り、詞を磨かんとせざれども、代も上がり、人の心も素直にして、ただ詞にまかせて言ひ出だせれども、心深く姿も高く聞こゆるなるべし。また、そのかみは、ことに撰集などいふこともなかりけるにや。ただ山上臣憶良といふ人なん、類聚歌林といふもの集めたりけれど、勅事などにしもあらざりければにや、ことに書き留むる人も少なくやありけん。世にもなべて伝はらず。見たる人も少なかるべし。ただ、万葉集のことばに、「山上臣憶良が類聚歌林に曰く」など書きたるばかりにぞ、さる事ありけると見えたる。「宇治の平等院の宝蔵にぞあるなると聞く」とぞ、物知りたりし者、語ること昔侍りしかど真にや侍らん。この憶良と申すは、柿本人麿など、同じ時の者なり。少し人麿よりは後達にやありけ³る。とぞ見えて侍る。憶良は遣唐使に、唐に渡りなどしたる者なり。その後、奈良のみやこ、聖武天皇の御時になん、橘諸兄の大臣と申す人、勅を承りて、万葉集をば撰ぜられけ⁴と申し伝ふめる。その頃までは歌の善き悪しきなど、強ひて選ぶことは、なかりけるにや。公宴の歌も、私の家々の歌も、その席に詠める程の歌は、数のままに入りたるやうにぞあるべき。それより前、柿本人麿なん、ことに歌の聖にはありけ⁵。これはいと常の人にはあらざりけるにや。かの歌どもは、その時の歌の姿にかなへるのみにもあらず。時世は様々改まり、人の心も歌の姿も、折につけつつ移り変はるものなれど、かの人の歌どもは、上古・中古、今の末の世までを鑑みけるにや、昔の世にも末の世にも、皆かなひてなむ見ゆめる。

その後、延喜の聖の帝の御時、**X**・紀貫之・凡河内躬恒・**Y**などいふ者ども、この道に深かりけるを聞こし召して、勅撰あるべしとて、古今集は撰び奉らしめ給ひけるな**丁**。この集の頃ほひよりぞ、歌の善き悪しきも、撰び定められたれば、歌の本体には、ただ古今集を仰ぎ信すべき事なり。万葉集より後、古今集の撰はることは、代々隔たり、年々数積もりて、歌の姿詞遣ひも殊の外に変はるべし。

(藤原俊成「古来風躰抄」)

問一 傍線部1はどのような意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 技巧で見栄えを良くし、表現に拘泥することはないが、古代人の心は朴訥ぼくとつであったので、言葉任せに詠っても味わいがあり、形式美も備わっていた。

b 洗練した表現を目指したり、様式を整えたりすることを意識することはなかったが、時代も古く、人の心は素直であつたので、そのまま表現しても、味わい深く格調高い歌となつた。

c 率直に思うままに歌い上げればすんだものが、時代が経たつにつれて、意識的に情趣を整え、表現技巧を精錬しなければ、気品のある歌と認められなくなつた。

d 技巧・スタイルを飾ったり、表現を工夫したりすることはないが、昔の人は素直に言葉のままを歌にしても情趣ある歌となつた。

問二 傍線部2はどのような意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 勅命に従わなかつたので、多くの人は書き写さなかつた。

b 勅撰歌集として認められなかつたので、誰も書き写さなかつた。

c 個人的に作られた歌集なので、書写する人は少なかつた。

d 勅命を受けて作られたので、多くの人が書写した。

問三 傍線部3はどのような意味か。次の中からもつとも適切なものを一つ選べ。

- a 昔、平等院に宝蔵があつたのは本当だろうか。
- b 平等院の宝蔵に万葉集があるというのは本当だろうか。
- c 類聚歌林が平等院の宝蔵にあると昔聞いたが本当だろうか。
- d 平等院の宝蔵に類聚歌林が昔あつたというのは本当だろうか。

問四 傍線部4はどのような推測に立って言っているのか。次の中からもつとも適切なものを一つ選べ。

- a 古今集以前は、歌の善し悪しを判断することなく、歌集に載せた。
- b 万葉集の歌は、歌の善し悪しよりも、どんな席で詠まれたかを基準に選ばれた。
- c 古今集以前は、歌の価値基準がまだ定まっていなかった。
- d 万葉集歌の善し悪しを判断するのは、古今集時代になって始められた。

問五 傍線部5のように筆者が言う理由として、もつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 遣唐使として唐にも派遣されるほどの秀才であつたから。
- b 歌の善し悪しを判断できる審美眼を有していたから。
- c 人も歌も変遷するのに、どの時代にも受け入れられるから。
- d 歌の聖の名声は未来永劫衰えることがないから。

問六 傍線部6はどういう意味か。次の中からもつとも適切なものを一つ選べ。

- a 歌の本質を見きわめるには、古今集に及ぶものはない。
- b 古今集は、神社の神体、寺の本尊のような存在である。
- c 歌の理想的な姿として古今集を範とすべきである。
- d 歌の始原は古今集にあることを信じなければならぬ。

問七 空欄 [甲]・[乙]・[丙]・[丁] に当てはまる一文字を次の中からそれぞれ選べ。

- a り
- b る
- c め
- d ん
- e れ

問八 空欄 X・Y に当てはまる人名を次の中から二人選べ。

- a 紀友則
- b 紀淑望
- c 在原業平
- d 小野小町
- e 壬生忠岑

問九 山上憶良の歌をA、柿本人麻呂の歌をB、紀貫之の歌をC、その他の歌をDとせよ。

- a 近江の海夕波千鳥汝が鳴けば心もしのにいにしへ思ほゆ
- b 銀しろかねも金くかねも玉も何せむにまされる宝子にしかめやも
- c 春過ぎて夏来るらし白たへの衣干したり天の香具山
- d 楽浪の志賀の大わだ淀むとも昔の人にまたも逢はめやも
- e 人はいさ心も知らずふるさは花ぞ昔の香に匂ひける

三

次の文章を読んで、後の問に答えよ。なお、設問の関係上、返り点・送り仮名を省いたところがある。

今世父兄莫不思欲教子弟、而不知下所以教之之法。以爲教子弟之法、莫善於制義。高者可以掇巍科、而卑亦不失榮名。於是子弟日夜竭精敝神、以攻其法、究之、得其法者、百不驗一。其質之最下者、固無²論。予独恠²具²聰穎特絶之資、而尽汨没²於其中者、爲可惜也。豈非父兄不善教之過歟。然則必如何而後可。予曰、其法莫善於³扶³賢師、而不³禁³子弟之博覽。賢師得、則議論名通、必不⁴囿⁴於章句之末、而有⁴以⁴發⁴聖賢經史之底蘊。使子弟日聞所未聞、博極⁵群書、則可⁵識⁵天下古今之得失、与⁵夫嘉謀偉論。因而⁵觸⁵類⁵旁⁵通、有⁵以⁵開⁵導⁵其聰明。而文遂⁵不可⁵勝用。

〔注〕○制義—官吏登用試験の論文の形式。 ○魏科—官吏登用試験における最高位。

○百不駮—一人も成果が上がない。 ○汨没—沈んで姿を消す。

○名通—(議論が)よく行き届き、優れていること。

○章句之末—文章の本質とは関係しない細々とした解釈。

○底蘊—奥底に包み隠された知識や思想。

問一 傍線部1「莫不思欲教子弟」とはどういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 子弟を教育しようなどと思ったことはない。
- b ぜひ子弟を教育したいと思っている。
- c 子弟が教わりたいことを教えてはならない。
- d 子弟に教師になって欲しいなどとは思わない。

問二 傍線部2「予独恠」とあるが、筆者は何を「恠」と思っているのか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 優れた資質を持った者が、制義の学習のために、かえって疲弊し、だめになっていってしまうこと。
- b 制義の法を修得できる者は、その資質の優劣にかかわらず、めったに出でこないこと。
- c 官吏登用試験に合格するために、青少年を追い詰めるようなことが平然と行われていること。
- d 試験に高位で合格し、官吏になることが、教育の最大の目的であると父兄が信じていること。

問三 傍線部3「豈非父兄不善教之過歟」とはどういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 父兄が悪くなければ、誤った教育方法がとられるはずがない。
- b 父兄の教育の仕方がよくなかったのではないか。
- c 父兄の教育が間違っていたなどということはない。
- d 父兄が正しいやり方で教育していても、あやまちは起きただろう。

問四 傍線部4「使子弟日聞所未聞」に返り点を施した次の選択肢の中から、もっとも適切なものを一つ選べ。

- a 使子弟日聞所未聞
- b 使子弟日聞所未聞
- c 使子弟日聞所未聞
- d 使子弟日聞所未聞

問五 傍線部5「不可勝用」とはどういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 官吏登用試験で有利にはならない。
- b あまりに高度なために使いこなせない。
- c やたらにひけらかしてはならない。
- d どのような場面や目的にも役に立つ。

問六 筆者は子弟の教育についてどのような考えを持っているか。次の中からもつとも適切なものを一つ選べ。

- a 子弟の教育は教師に任せるべきで、父兄はあまり口出ししない方が望ましい。
- b 優れた教師を選ぶよりも、幅広い分野の書物を読ませる方が効果がある。
- c 実際の役に立つことだけを学ぶのではなく、幅広く様々なことを学ぶべきである。
- d 学習にあたっては儒学と史学を中心に、少しずつ関心を広げるのがよい。

問七 この文章は、韓愈「師説」を意識して書かれている。その韓愈と同時代の人物を、次の中から一人選べ。

- a 王維
- b 杜甫
- c 柳宗元
- d 蘇軾

